



Title	日本語学習者の「他動詞＋テアル」の使用傾向 : 「自動詞＋テイル」と比較して
Author(s)	新谷, 知佳
Citation	阪大日本語研究. 2026, 38, p. 33-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104189
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語学習者の「他動詞＋テアル」の使用傾向 ——「自動詞＋テイル」と比較して——

Usage of “Transitive Verb + *Tearu*” by Learners of Japanese : A Comparison with “Intransitive Verb + *Teiru*”

新谷 知佳
SHINTANI Chika

キーワード：自他対応、テアル、テイル、コーパス、I-JAS

要旨

本稿の目的は、自他対応をもつ他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現について、日本語学習者に特有の使用傾向を明らかにすることである。対象を、他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現の中でも本来他動詞のヲ格であったものがガ格として現れる文に限定し、自他対応の関係にある自動詞のテ形に補助動詞「いる」を伴う表現の使用傾向と比較する。分析は、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』から収集した日本語母語話者と日本語学習者のデータをもとに行う。分析の結果、日本語学習者に特有の「他動詞＋テアル」の使用傾向として、静的な絵の描写によく用いる傾向があること、A2型の「他動詞＋テアル」をよく用いる傾向があることの2点を指摘する。そして、その要因について、コロケーションの偏りを手がかりに、日本語教育での「他動詞＋テアル」の取り扱い、インプットの量と質の差という点から考察を行い、教室における日本語学習が影響していることを述べる。

1. はじめに

本稿の目的は、自他対応をもつ他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現について、日本語学習者（以下、学習者）に特有の使用傾向を明らかにすることである。学習者の自他対応動詞の使用に着目し、他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現と類義性をもつ、自動詞のテ形に補助動詞「いる」を伴う表現の使用傾向と比較する。そのため、本稿ではこれ以後、「自動詞」は自他対応をもつ自動詞を、「他動詞」は自他対応をもつ他動詞を指す。

対象とする表現は、他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現のうち、(1b)のように本来他動詞のヲ格であったものがガ格として現れる文とする。

- (1) a. ドアを開ける。
- b. ドアが開けてある。

このような文の他動詞のテ形と補助動詞「ある」を指して、「他動詞+テアル」と呼ぶ。

そして、「他動詞+テアル」の他動詞と対応関係にある自動詞のテ形と補助動詞「いる」を指して、「自動詞+テイル」とする。例えば、(2)のような文が「自動詞+テイル」の文にあたる。

(2) ドアが開いている。

分析には、『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』(以下、I-JAS)から得たデータを用いる。I-JASは、日本語母語話者(以下、母語話者)と学習者のそれぞれに同じタスクを課したデータを有しているという特徴を持っており、同一場面での両者の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向を比較するのに適している。

本稿では、I-JASのデータをもとに使用場面と意味の観点から分析を行い、学習者の「他動詞+テアル」の使用傾向について、静的な絵の描写でよく用いる傾向にあること、益岡(1987)におけるA2型の「他動詞+テアル」をよく用いる傾向にあることの2点を指摘する。尚、益岡(1987)については、2.2節で後述する。

さらに、これらの使用傾向を示す要因について、学習者のコロケーションの偏りを手がかりに、日本語教育での「他動詞+テアル」の取り扱い、学習環境による比較から見えるインプットの量の差、習熟度による比較から見えるインプットの質の差という点から考察を行い、日本語教育の中でも特に教室学習の影響が現れていることを示す。

本稿は次の構成をとる。2節で先行研究に触れ、3節で分析方法を示す。4節で各タスクにおける母語話者と学習者の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向を比較したのち、5節で母語話者と学習者の用いる「他動詞+テアル」の意味について分析する。6節で使用傾向に影響を与える要因の考察を行い、7節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 先行研究

2.1. 自他対応について

本稿では、自他対応の観点から、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向を比較する。言い換えると、自他対応の関係にある自動詞と他動詞における「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用頻度をもとに、「自動詞+テイル」と比べてどの程度「他動詞+テアル」が用いられているかを分析する。

ここで言う自他対応とは、(3)に示す定義を満たすものを指す。(3)は奥津(1967)、早津

(1987)を参考にまとめられた新谷(2022)の自他対応の定義である。

- (3) ①自動詞と他動詞が形態的に共通する部分をもつもの
- ②自動詞と他動詞の表す意味に同一性がみられるもの
- ③自動詞文のガ格が他動詞文の動作の対象を表すヲ格として現れるもの

(新谷2022: 74)

本稿の分析の対象は、(3)の定義を満たす自他対応動詞の用例のうち、動作主の意図性の有無によって、自他が使い分けられる用例のみとし、(4)のような用例は分析対象から除く。これは、動作主の意図性を含意する自動詞に対応する他動詞は、(5)のように意図性をもった主体の動作をひきおこすという使役に準ずる意味を表し、(6)のように「他動詞+テアル」は非文となるためである。

- (4) 人がバス停に立っている。
- (5) 人をバス停に立てる。
- (6) *人がバス停に立ててある。

2.2. 「他動詞+テアル」について

益岡(1987)によると、日本語の動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現は、大きくA型とB型に分けられ、さらにA1型、A2型、B1型、B2型に細分化される。

A型は「場面描写表現」(益岡 1987: 224)にあたり、A1型は、行為の結果もたらされる、対象の或る場所での存在を描写するタイプの表現、A2型は、或る行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態が、視覚可能な形で存続していることを描写するタイプの表現であるという。そして、これらのうち、A1型のみが広義の存在表現にあたることが指摘されている。A1型の例を(7)に、A2型の例を(8)に示す。

- (7) リビングテーブルには花が飾ってある。
- (8) 入口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。

(益岡(1987)より抜粋、下線は筆者による)

一方、B型は、特定の動作主がガ格の位置を占め、行為の結果もたらされる事態の基準時における存続性や有効性を表すとされ、B1型は、行為の事態の存続を表すのに対し、B2型は、

行為の結果が問題にされるだけでなく、行為自体にも重きが置かれるという。B1型の例を(9)に、B2型の例を(10)に示す。

(9) 大使館員の話では、古河健志は荷物も所持金も一切をレイクサンドのホテルに残してあったという。

(10) それで、京都府警に鑑定をたのんであるの。

(益岡(1987)より抜粋、下線は筆者による)

この益岡(1987)の分類について、三宅(2015)は、文法化という観点から、それぞれの関係性を指摘している。A1型は、存在の場所を表す項(“～に”)が生起していることに触れた上で、「存在の意味を表す本動詞としての“ある”の性質を色濃く保持していると言える」(三宅 2015:245)と述べている。そして、B型は、「存在の意味が抽象化され、アスペクト的な意味を表す機能語的な性質を持つに至って」(三宅 2015:245)おり、A2型はその中間段階であるという。

益岡(1987)、三宅(2015)を参考に、本稿では、他動詞のテ形に補助動詞「ある」を伴う表現をA1型、A2型、B型の3つに分ける。A1型は、存在の場所を表す二格が生起している、あるいは生起可能なもの、B型は、特定の動作主がガ格として生起している、あるいは生起可能なものとし、存在の場所を表す二格も特定の動作主を表すガ格も生起できないものをA2型とする。

本稿で対象とする「他動詞+テアル」は、本来他動詞のヲ格であったものがガ格として現れる文を指すため、A1型、A2型のいずれかにあたる。より文法化が進み、特定の動作主をガ格、対象をヲ格で示し、機能語的な性質を持つB型は、「自動詞+テイル」との類義性が薄れるため、扱わない。

2.3. テアルのコーパスを用いた比較について

中俣(2011)では、「てある」と「ておく」を取り上げて、コーパスデータをもとに母語話者と学習者の使用実態が調査されており、学習者の話し言葉については、『日本語学習者会話データベース』(国立国語研究所)と『名大会話コーパス』(国立国語研究所)を用いた分析がなされている。その結果として、「名大会話コーパスでは5,081文字に1度の割合で「てある」が出現するのに対し、学習者コーパスでは87,184文字に1度の割合であり、約17倍の開きがあった」(中俣 2011:227)との記述がある。また、母語話者の「てある」の用例の50%を「書いてある」が占めており、学習者も同様の傾向、つまり「書いてある」を多用する傾向に

あることが指摘されている。学習者の「てある」の使用は母語話者と比べて少ないが、「書いてある」に限れば、その使用傾向は母語話者と一致しているということである。

この結果は非常に示唆的であるものの、次の2点についてさらなる検討の余地があると考えられる。1点目は自他対応である。母語話者と学習者ともに最も多いとされる「書いてある」は自他対応をもたない動詞であるが、自他対応をもつ動詞における自他の使い分けに着目することで、新たな使用傾向が見出されることが予想される。2点目は使用するコーパスである。中俣（2011）では、学習者と母語話者の各データを異なるコーパスから集め、比較しており、各コーパスの設計や話題が影響した可能性が考えられる。

そこで、本稿では、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使い分けに着目し、母語話者、学習者ともにI-JASからデータを集める。さらに、I-JASの中の各タスクを分けて分析することで、使用場面を限定した分析を試みる。

3. 分析方法

I-JASにおける自他対応動詞の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用頻度をもとに算出した、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用比率を分析に用いる。用例収集の手順と使用比率の算出方法は以下のとおりである。

まず、コーパス検索アプリケーション『中納言』の短単位検索を用い、(11)の検索条件で用例を抽出した。

- (11) キー：品詞 大分類 動詞
キーから1語：語彙素「て」
キーから2語：語彙素「有る」

得られた用例のうち、2.1節の要件を満たさないもの、複合動詞の一部であるもの、同一発話内での繰り返しにより重複しているものおよび学習者のガ格とヲ格の誤用や活用の誤用にあたるものを除く作業を実施し、タスク別に整理した。

次に、タスク別に、「他動詞+テアル」の他動詞と対応関係にある自動詞をリストアップし、(12)(13)の検索条件で用例を抽出した。

- (12) キー：語彙素に自動詞をそれぞれ指定
キーから1語：語彙素「て」

キーから2語：語彙素「居る」

(13) キー：語彙素に自動詞をそれぞれ指定

キーから1語：語彙素「てる」

「他動詞+テアル」のときと同様に、2.1節の要件を満たさないもの、複合動詞の一部であるものの、同一発話内での繰り返しにより重複しているものおよび学習者のガ格とヲ格の誤用や活用の誤用にあたるものを除く作業を実施した。

最後に、それぞれの対における「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の割合を使用比率として算出した。その方法について、絵描写における学習者の「開いている」と「開けてある」を例に挙げる。「開いている」の用例は85件、「開けてある」の用例は8件確認できるため、学習者の「開く：開ける」の対における「自動詞+テイル」の使用比率は91.4%、「他動詞+テアル」の使用比率は8.6%となる。

4. 各タスクにおける日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向

1つ目の分析として、I-JASの各タスクにおける日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向を比較する。

分析には、コーパス検索アプリケーション『中納言』で検索可能な、I-JASのタスク8つ（絵描写、対話、ストーリーテリング1・2、ストーリーライティング1・2、ロールプレイ1・2）から、「他動詞+テアル」の用例が確認できなかった、ロールプレイ1・2を除いた6つのタスクのデータを用いる。6つのタスクのうち、ストーリーテリング1とストーリーライティング1、ストーリーテリング2とストーリーライティング2は、話すタスクと書くタスクという違いはあるものの、同一のイラストを描写するタスクである。そのため、それぞれ1つにまとめ、ストーリーテリング1とストーリーライティング1を「ST1&SW1」、ストーリーテリング2とストーリーライティング2を「ST2&SW2」として分析することにした。

4.1節で絵描写、4.2節で対話、4.3節でST1&SW1、4.4節でST2&SW2、4.5節でまとめを述べる。

4.1. 絵描写

絵描写のタスクは、被験者（学習者）が図1のイラストを見て説明するというタスクである。調査者によるあいづちや、家の中あるいは外のことについての説明を促す発話が行われるが、基本的には被験者（学習者）の気づきに基づく自主的な発話である。



図1 絵描写のイラスト (迫田他 2016 : 100)

絵描写に見られた、10対の自他対応動詞の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用頻度および使用比率を表1にまとめた。

表1 絵描写における使用傾向

	母語話者		学 習 者	
	自+テイル	他+テアル	自+テイル	他+テアル
開く：開ける	6 (100.0%)	0 (0.0%)	85 (91.4%)	8 (8.6%)
植わる：植える	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)
掛かる：掛ける	34 (89.5%)	4 (10.5%)	15 (50.0%)	15 (50.0%)
消える：消す	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)
差さる：差す	12 (92.3%)	1 (7.7%)	8 (88.9%)	1 (11.1%)
締まる：締める	7 (100.0%)	0 (0.0%)	29 (96.7%)	1 (3.3%)
散らかる：散らかす	3 (100.0%)	0 (0.0%)	27 (93.1%)	2 (6.9%)
付く：付ける	21 (100.0%)	0 (0.0%)	135 (89.4%)	16 (10.6%)
沸く：沸かす	12 (100.0%)	0 (0.0%)	56 (98.2%)	1 (1.8%)
割れる：割る	49 (100.0%)	0 (0.0%)	141 (97.9%)	3 (2.1%)
計	144 (96.6%)	5 (3.4%)	496 (91.0%)	49 (9.0%)

絵描写における「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の合計を見てみると、母語話者の「他動詞+テアル」の使用は5件（3.4%）であるのに対し、学習者は49件（9.0%）で、母語話者と比べて学習者の「他動詞+テアル」の使用比率が高いことがわかる。

そして、「他動詞+テアル」に用いる他動詞は、母語話者では「掛ける」が最も多いが、学習者は、「付ける」が最も多く、「掛ける」「開ける」と続く。その他の他動詞についても、学習者は様々な他動詞を用いているのに対し、母語話者は「差す」の1例のみである。このことから、「他動詞+テアル」に用いる他動詞についても使用傾向の異なりが確認できる。

4.2. 対話

対話のタスクは、被験者（学習者）と調査実施者が自然な会話を30分程度行う、対話形式のタスクである。話題は全15項目用意されており、前半は学習者本人に関する過去、現在、未来について話せるものをバランスよく配置し、後半には、談話レベルの発話が引き出せるよう、意見陳述や反論ができるような話題を設定するという工夫がなされている。

対話に見られた、3対の自他対応動詞の使用頻度および使用比率をまとめたものが表2である。

表2 対話における使用傾向

	母語話者		学習者	
	自+テイル	他+テアル	自+テイル	他+テアル
掛かる：掛ける	5 (83.3%)	1 (16.7%)	10 (100.0%)	0 (0.0%)
切れる：切る	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (100.0%)
残る：残す	0 (0.0%)	1 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
計	5 (71.4%)	2 (28.6%)	10 (90.9%)	1 (9.1%)

対話における「他動詞+テアル」の用例は、母語話者の「掛ける」「残す」、学習者の「切る」の各1例に留まった。そのため、この結果から量的な指摘をするのは難しい。しかし、50人の被験者に限られる母語話者で2例見られたのに対し、1,000人の被験者がいる学習者で1例であったという結果は、対話のような自由度の高い会話では母語話者の方が「他動詞+テアル」をよく用いる可能性を示唆している。また、この結果は中俣（2011）の指摘とも一致する。

4.3. ST1&SW1

ストーリーテリングのタスクは、被験者（学習者）が図2のようなイラストを見て、ストーリーを話す独話形式のタスクである。一方、ストーリーライティングのタスクは、ストーリーテリングと同一のイラストを見て、ストーリーをPCで入力するというタスクである。

ST1&SW1のイラストは図2の「ピクニック」である。

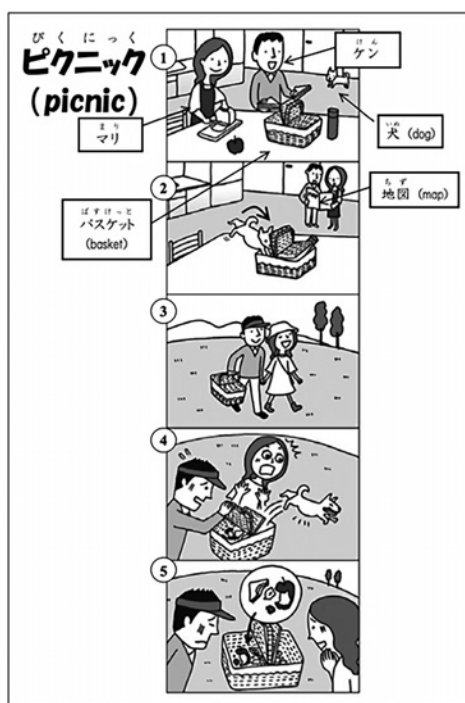


図2 ST1&SW1のイラスト（迫田他2016：99）

ST1&SW1に見られた、自他対応動詞「入る：入れる」の使用頻度および使用比率を表3に示した。

表3 ST1&SW1における使用傾向

	母語話者		学習者	
	自+テイル	他+テアル	自+テイル	他+テアル
入る：入れる	0 (0.0%)	2 (100.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)

ST1&SW1では、母語話者と学習者ともに、「入れる」の用例のみが確認された。そして、いずれもバスケットに収められた食べ物に言及したものであった。(14)は学習者の例、(15)は母語話者の例である。尚、これ以後提示するI-JASから収集した例には、サンプルID、データセット、連番、発話番号、被験者の母語を示してある。

(14) 行く前にマリはパンを作って、籠に入れてあります。

(JJE03-SW1_第三次データ_160_00010_ベトナム語)

(15) なんと、中に入れてあったサンドイッチとりんごはかじられてしまっていました。

(JJJ47-SW1_第二次データ_1260_00060_日本語)

図2を見ると、①にケンとマリがサンドイッチを準備している様子が描かれており、食べ物は意図的にバスケットに収められたものであることがわかる。このような場面では、母語話者も「他動詞+テアル」を用いており、学習者と使用傾向の差は見られないと考えられる。

4.4. ST2&SW2

ST2&SW2では、図3の「鍵」のイラストが用いられている。

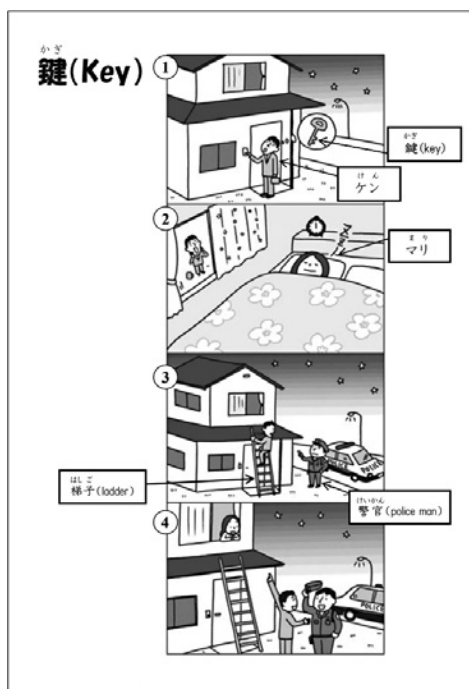


図3 ST2&SW2のイラスト (迫田他2016: 99)

ST2&SW2に見られた、2対の自他対応動詞の使用頻度および使用比率を表4に示す。

表4 ST2&SW2における使用傾向

	母語話者		学習者	
	自＋テイル	他＋テアル	自＋テイル	他＋テアル
開く：開ける	13 (100.0%)	0 (0.0%)	26 (89.7%)	3 (10.3%)
締まる：締める	5 (100.0%)	0 (0.0%)	5 (62.5%)	3 (37.5%)
計	18 (100.0%)	0 (0.0%)	31 (83.8%)	6 (16.2%)

ST2&SW2では、「他動詞＋テアル」の用例は、学習者にのみ確認された。そして、「他動詞＋テアル」に用いる他動詞は、絵描写でも多く使われていた他動詞である「開ける」と、「開ける」と対義関係にある「締める」であった。「開ける」の例を(16)に、「締める」の例を(17)に示す。

(16) でも、窓が開けてあったので、ケンは梯子を見つけて、梯子で入ってみました。

(EGB11-SW2_第五次データ_790_00040_英語)

(17) けど、鍵が閉めてありました。

(RRS28-SW2_第三次データ_230_00020_ロシア語)

一方、母語話者は「開く：開ける」「締まる：締める」において、「自動詞＋テイル」のみを用いていた。「開く」の例を(18)に、「締まる」の例を(19)に示す。

(18) 2階の窓が開いています。

(JJJ47-SW2_第二次データ_270_00020_日本語)

(19) 夜遅くに仕事から家に帰ると、家の鍵は閉まっていました。

(JJJ28-SW2_第二次データ_190_00010_日本語)

(16)と(18)を比べてみると、いずれも描写の対象は「窓」であるが、学習者は「他動詞＋テアル」を、母語話者は「自動詞＋テイル」を用いていることがわかる。そして、(17)と(19)についても、同じ「鍵」を描写しているが、学習者は「他動詞＋テアル」を用いているのに対し、母語話者は「自動詞＋テイル」を用いている。

このように、同一の描写対象について、母語話者と学習者で異なる表現を用いる傾向が見られた。ST1&SW1、ST2&SW2はいずれもストーリーを説明するタスクという点では共通して

いる。しかし、ST1&SW1の図2では準備の様子が描かれていたのに対し、ST2&SW2の図3では、マリが窓を開けたり、ドアや鍵を閉めたりする様子は描かれておらず、その意図性は不明である。後者のように動作主の意図性が不明な場面において、母語話者と学習者に使用傾向の差が見られたと言える。

4.5. まとめ

本節では、絵描写、対話、ST1&SW1、ST2&SW2の各タスクにおける、母語話者と学習者の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向の比較を行った。その結果として、絵描写とST2&SW2では学習者の方が「他動詞+テアル」を用いる傾向にあり、対話、ST1&SW1では母語話者と学習者の傾向に差は見られないことを示した。絵描写やST2&SW2のように、動作主の意図性を読み取れない静的な絵の描写場面において、母語話者と学習者に「他動詞+テアル」の使用傾向の差が確認できたと言える。

寺村（1984）に、「眼前の事態がある変化の結果であり、その変化がだれによってひきおこされたに違いないとしても、それを受身でなく、自発態や自動詞を使って、つまり自然に生じた変化のようにいうほうが自然だ、という場合が実際には多い」（p. 151）という記述があるが、母語話者のこのような使用傾向が、今回の分析により量的にも示されたと言える。

本節で明らかとなった、学習者に特有の「他動詞+テアル」の使用傾向を(20)にまとめる。

(20) 学習者は、静的な絵の描写場面で「他動詞+テアル」をよく用いる傾向にある。

5. 母語話者と学習者の用いる「他動詞+テアル」が表す意味

2つ目の分析として、「他動詞+テアル」の意味に着目し、A1型にあたるか、A2型にあたるかという観点から用例を分類した上で、母語話者と学習者の使用傾向を比較する。尚、本節の分析には、母語話者と学習者の使用傾向に差が見られた絵描写およびST2&SW2の用例を用いる。

まず、母語話者の「他動詞+テアル」の用例5例を確認すると、存在の場所を表す二格が現れたA1型の「他動詞+テアル」が4例、着点の二格が現れたA2型の「他動詞+テアル」の用例が1例であった。A1型の例を(21)に、A2型の例を(22)に示す。

(21) でえーとその家の中では、壁に絵が掛けてあって、（後略）

(JJJ13-D_第二次データ_870_00070_日本語)

(22) その横に、人が倒れていて、そのお腹には包丁が刺してあります

(JJJ07-D_第二次データ_1530_00110_日本語)

母語話者の用例は少なかったが、5例中4例がA1型であった。

続いて、学習者の「他動詞＋テアル」の絵描写の用例49例を確認すると、A1型は21例、A2型は28例であった。また、ST2&SW2の用例6例はいずれもA2型であった。学習者のA1型の例を(23)に、A2型の例を(24)に示す。

(23) 流しの上に絵が、掛けてあります

(VVN22-D_第一次データ_1450_00160_ベトナム語)

(24) あー、電気がまだつけて、つけてあります

(EGB28-D_第五次データ_7590_00400_英語)

絵描写で49例中28例、ST2&SW2で6例中6例がA2型であり、学習者のA2型の「他動詞＋テアル」の使用は、母語話者と比べて多いことがわかる。

母語話者にはほとんど使用が見られないA2型の「他動詞＋テアル」が、学習者の用例には多く見られ、学習者は存在表現としての「他動詞＋テアル」だけではなく、行為の結果もたらされた対象の何らかの状態が視覚可能な形で存続していることを描写する「他動詞＋テアル」も多く用いる傾向にあることが明らかとなった。(25)にまとめる。

(25) 学習者は、A2型の「他動詞＋テアル」をよく用いる傾向にある。

6. 使用傾向に影響を与える要因の考察

学習者の「他動詞＋テアル」の使用傾向を(26)に再掲する。

(26) a. 学習者は、静的な絵の描写場面で「他動詞＋テアル」をよく用いる傾向にある。

((20)の再掲)

b. 学習者は、A2型の「他動詞＋テアル」をよく用いる傾向にある。((25)の再掲)

本節では、なぜ学習者に(26)のような使用傾向が見られるのかについて、コロケーションの偏りを手がかりに、日本語教育における「他動詞＋テアル」の取り扱い方、インプットの

量と質という点から考察を行う。

6.1節で学習者に見られるコロケーションの偏り、6.2節で日本語教育における「他動詞＋テアル」の取り扱いを確認し、6.3節で使用傾向に影響を与える要因をまとめる。

6.1. 学習者に見られるコロケーションの偏り

ここで言うコロケーションとは、本来他動詞のヲ格にあたる名詞句が、同一の発話内に「が、は、も」の助詞を伴って現れているものと動詞の組み合わせを指す。たとえば、(27)のコロケーションは「皿」と「割る」となる。

(27) 皿が地上に割ってあります

(CCS53-D_第五次データ_930_00080_中国語(台湾))

母語話者と学習者の、絵描写およびST2&SW2における「他動詞＋テアル」のコロケーションについて、A1型とA2型に分けて表にまとめたものが、表5および表6である¹⁾。母語話者、学習者の順に提示し、それぞれ使用頻度の大きいものから順に並べてある。

表5 A1型のコロケーション

	母語話者		学習者							
	掛ける		掛ける		付ける		散らかす		植える	
1	絵	3	絵 ¹	9	絵	1	お金	2	ぶどうと花	1
2	服	1	コート	5	木	1				
3			橋	1	電話	1				
計		4		15		3		2		1

(¹絵／写真)

表6 A2型のコロケーション

母語話者			学習者														
差す			付ける		開ける		締める		割る		差す		沸かす		消す		
1	包丁	1	電気* ²	11	ドア	5	肉屋	1	窓* ⁴	2	ナイフ	1	お湯	1	電気	1	
2			ガス* ³	2	窓	2	ドア	1	皿	1							
3							鍵	1									
4							窓	1									
計		1		13		7		4		3		1		1		1	

(^{*2}電気／電球／ライト、^{*3}ガス／ガスレンジ、^{*4}窓／ガラス)

表5を見ると、A1型では母語話者に多い「掛ける」が学習者にも多く見られ、そのコロケーションも「絵／写真」「コート」で一致していることがわかる。一方、表6からは、母語話者には「包丁」と「差す」のコロケーションのみが見られたのに対し、学習者ではさまざまなコロケーションが確認でき、その中でも「電気／電球／ライト」と「付ける」、「ドア」と「開ける」の使用が特に多いことが読み取れる。

つまり、(26ab) のような学習者の「他動詞+テアル」の使用傾向が見られた背景には、「電気／電球／ライト」と「付ける」、「ドア」と「開ける」を多く用いるというコロケーションの偏りがあったことがうかがえる。

6.2. 日本語教育における「他動詞+テアル」の取り扱い

(26ab) のような学習者の「他動詞+テアル」の使用傾向について、日本語教育における「他動詞+テアル」の取り扱いと照らし合わせながら考察する。

本稿では、教師用参考書として、市川（2005）と友松・宮本・和栗（2010）の2冊、初級日本語教科書として、『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』（以下、『みんなの日本語』）と『初級日本語げんきⅡ 第3版』（以下、『げんき』）2冊の計4冊の日本語教育のテキストを取り上げる。紙幅の都合上、すべての例を取り上げることはできないため、適宜例を選択し、それに基づいて議論を進める。

6.2.1. 「他動詞+テアル」の提示文について

市川（2005）では、「～てある・～ておく」を扱った項目において、「～てある」と「～ている」の関係について触れ、結果の状態を表す点でよく似ている「「～が」＋無意志動詞（自動詞）＋ている」と「「～が」＋意志動詞（他動詞）＋てある」を比較している。そして、「～ている」は自動詞と、「～てある」は他動詞と結び付き、意味的に重なる部分があるものの、話し手の注目点が異なると述べている。前者の例として(28)(29)、後者の例として(30)(31)を示す。

(28) 窓が開いている

(29) エアコンがついている

(30) 窓が開けてある

(31) エアコンがつけてある

（市川（2005）より抜粋、下線は筆者による）

(28)と(30)、(29)と(31)がそれぞれ対応関係にあり、(30)(31)の「他動詞＋テアル」の文はいずれもA2型にあたるものである。

友松・宮本・和栗(2010)では、「自動詞＋ています」と「他動詞＋てあります」が同一ページに掲載されており、前者は見える状態をそのまま言うとき、後者はある目的をもってそうしたと言うときに用いると説明されている。例を(32)(33)に示す。

(32) ドアが開いています。

(33) ドアが開けてあります。

(友松・宮本・和栗(2010)より抜粋、下線は筆者による)

ここでも、(32)と(33)は対応関係にあり、(33)の「他動詞＋テアル」の文はA2型にあたる。

一方、『みんなの日本語』では、第30課で「てある」「ておく」が取り上げられているが、自他の対応については触れられていない。第30課に現れる「てある」の例の一部を(34)(35)(36)に示す。

(34) 交番に町の地図がはってあります。

(35) 電気やガスが止まっても、3日ぐらい生活できる物が入れてあるんです。

(36) 窓が閉めてありませんでしたよ。

(『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』第30課より抜粋、下線は筆者による)

『みんなの日本語』では、提示されている例の多くが(34)のようなA1型で、「～に～が〈他動詞〉てある」の練習が多く行われている。しかしながら、会話には、(35)、文法練習のためのドリルには(36)のようなA2型が現れており、A1型に限定して提示しているわけではないようである。

『げんき』では、第21課の文法項目の一つに「～てある」が取り上げられている。「～が verb ＋てある」は「has been done on purpose (意図的に行われた)」と説明され、(37)(38)の例が示されている。そして、「ておく」で表されるような誰かの意図的な行動の結果としての現在の状態を描写する際に「てある」が用いられると説明された後、(39)(40)の例が示されている。

(37) 寒いので、ヒーターがつけてあります。

(38) テーブルの上に花が置いてあります。

(39) レストランの予約がしてあります。

(40) パンが買ってあります。

(『初級日本語げんきⅡ 第3版』第21課より抜粋、下線は筆者による)

(38)はA1型の例である。(37)は、「ヒーターを付ける」という行為の結果もたらされた、ヒーターの状態が視覚可能な形で存続していることを描写するA2型の例である。(39)(40)は、「予約をしたこと」「買ったこと」は、視覚できるものではないため、行為の結果の事態を示すB型の例である。益岡(1987)に、B1型は「ヲ格・ガ格の交替」があり、「対象をガ格で表すことによって、これに焦点を置くことができる」(益岡 1987: 227)との記述があるように、B型であっても対象がガ格で示される場合があり、(39)(40)はこれに該当すると考えられる。

また、『げんき』は自他対応にも触れており、「ている」は自動詞、「てある」は他動詞と用いられることが説明されている。例を(41)(42)に示す。

(41) 窓が閉めてあります。

(42) 窓が閉まっています。

(『初級日本語げんきⅡ 第3版』第21課より抜粋、下線は筆者による)

(41)と(42)は対応関係にあり、(41)の「他動詞+テアル」の文はA2型にあたる。

以上より、自他対応動詞と共に用いられる「てある」「ている」を説明する際に、A2型の例のみが取り上げられていることに加え、「てある」の中での意味の違いが詳しく説明されている箇所は見当たらず、初級日本語教科書では、A1型とA2型の例が混在していた。これらの特徴が、学習者にA2型の「他動詞+テアル」の使用が多く見られたことにつながったと考えられる。

さらに、これらの例のコロケーションには、前節で示した学習者に見られたコロケーションの偏りと同様の偏りが確認できる。(28)～(42)の例のうち、自他対応をもたない動詞の例である(34)(38)を除く、13例について見ていく。

まず、自他対応の説明の中で取り上げられた例を見てみると、市川(2005)の(28)～(31)では「エアコン」と「付ける」、「窓」と「開ける」、友松・宮本・和栗(2010)の(32)(33)では「ドア」と「開ける」、『げんき』の(41)(42)では、「窓」と「締める」が用いられていた。次に、それ以外の例を見てみると、『みんなの日本語』の(35)では、「物」と「入れる」、(36)では、「窓」と「締める」が、『げんき』の(37)では「ヒーター」と「付ける」が用いられている。

まとめると、「エアコン」「ヒーター」などの電化製品と「付く：付ける」、「窓」「ドア」と「開く：開ける」「締まる：締める」がよく用いられており、学習者のコロケーションに見られた、「電気／電球／ライト」と「付ける」、「ドア」と「開ける」を多く用いるという偏りと概ね一致している。

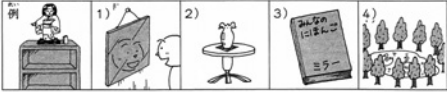
このように、一部のコロケーションが日本語の教科書や教師用参考書で頻出する表現となっているため、これらが学習者にとって馴染みのある表現となっていると予想される。その結果として、I-JASにおけるタスクでも「電気」の描写や、「ドア」の描写に「他動詞＋テアル」を使用したと考えられる。

6.2.2. 「他動詞＋テアル」のドリルについて

続いて、初級日本語教科書における「他動詞＋テアル」のドリル練習を確認する。『みんなの日本語』の練習Bの一部を図4に、『げんき』の練習Ⅱの一部を図5に示す。

練習B

1. 例： → 机の 上に 人形が 飾って あります。
 1) → 2) → 3) → 4) →



2. 例： 買った物の メモは どこですか。
 → 冷蔵庫に はって あります。
 1) カレンダーは どこですか。 →
 2) ごみ箱は どこですか。 →
 3) はさみは どこですか。 →
 4) コップは どこですか。 →



図4 『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』第30課 練習B

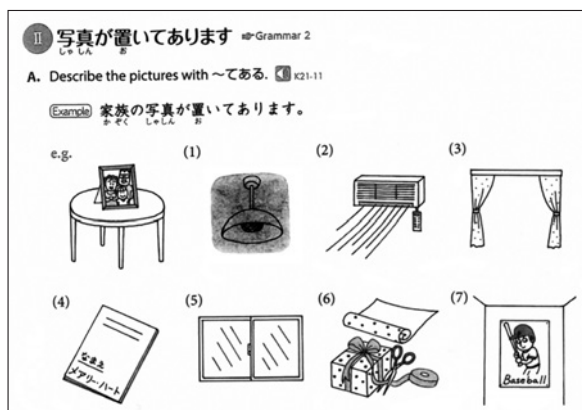


図5 『初級日本語げんき II 第3版』第21課 練習II・A

これらから、いずれの教科書においても、イラストを描写する文作成練習が取り入れられていることがわかる。また、作られる文は、A1型とA2型の「他動詞＋テアル」が混在している。

このように、日本語教育において「他動詞＋テアル」の練習の際に、イラストを用いていること、特に、A2型であってもイラストを用いて練習が行われていることが影響し、I-JASの絵描写のタスクでも学習者はA2型の「他動詞＋テアル」を多く使用したと考えられる。

6.2.3. まとめ

以上見てきたように、教師用参考書では、類似した表現である「てある」と「ておく」、「自動詞＋テイル」と「他動詞＋テアル」を比較し、それぞれの意味の違いが提示されている。一方、初級日本語教科書では、動詞のテ形に「ある」が付く形の導入に重きが置かれ、『みんなの日本語』でも『げんき』でも「ておく」との意味の違いに触れており、自他の対応については、触れないあるいは補足的に扱われるのみであった。

そして、提示される例には、電化製品のオンオフ（付く：付ける）、窓やドアの開閉（開く：開ける、締まる：締める）が多く用いられており、それらはA2型の「他動詞＋テアル」にあたる。また、いずれのテキストにおいても、A1型、A2型、B型のような「てある」の中の意味の違いが詳しく説明されている箇所は見当たらなかった。

これらのテキストでは、太田（2017）にも指摘があるように、「てある」を使うことが決められているから「てある」を用いて答える練習を行っており、いつ使うかについては十分に伝えられていない。太田（2017）では、「文脈化」というアプローチで、改善の提案がなされているが、本稿では、コーパスデータによる、母語話者と比較した学習者の使用傾向の量的なデータに基づき、改善案を提示する。

本節では、計4冊のテキストを取り上げたに過ぎず、一般化にはより多くの教材を検証する必要があると思われる。しかしながら、いずれもシェアの大きなテキストであることから、本稿では、これら4冊における扱われ方を日本語教育における「他動詞+テアル」の取り扱いとして論を進めることとする。

6.3. 使用傾向に影響を与える要因

学習者に見られた使用傾向である(26ab)について、学習者に見られるコロケーションの偏り、日本語教育における「他動詞+テアル」の取り扱いから、学習者の「他動詞+テアル」の使用傾向には、日本語教育の影響が関わっていると推察する。

日本語教育のテキストは独学でも触れる可能性のあるものではある。しかし、電化製品のオンオフ、窓やドアの開閉が教室で実演しやすいことに加え、次に示すインプットの量と質と使用傾向の関わりが見られることから、日本語教育の中でも特に教室学習の影響が現れていることを指摘したい。尚、ここでも、母語話者と学習者の使用傾向に差が見られた絵描写およびST2&SW2のデータを用いる。

まず、学習者の学習環境である。学習者は、I-JASに収録されている情報から、海外の教育機関で日本語を学ぶ学習者(JFL学習者)と、来日して日本の教育機関で日本語を学ぶ「国内教室環境学習者」および就労・結婚等で来日し、生活の中で日本語を自然に学ぶ「国内自然環境学習者」を含む日本国内の学習者(JSL学習者)に分けることができる。JSL学習者は、日常生活において様々な場面で豊富な日本語のインプットがあるのに対し、JFL学習者の日本語のインプット量は限定的であるという違いがある。

JFL学習者、JSL学習者、母語話者の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向のグラフを図6に示す。

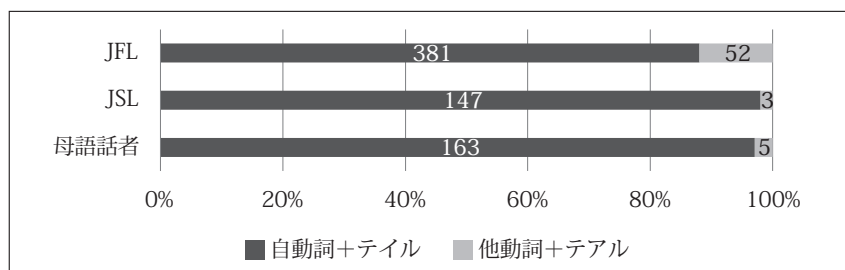


図6 JFL、JSL、母語話者の使用傾向

図6を見ると、JSL学習者は母語話者の使用傾向に近いのに対し、JFL学習者は「他動詞+

「テアル」の使用比率が高いことがわかる。この結果から、JFL学習者とJSL学習者のインプット量の差が「他動詞+テアル」の使用傾向に影響を与えていることがうかがえる。

次に、学習者の習熟度である。I-JASには、J-CATとSPOTという2つの日本語習熟度を示すデータが含まれているが、ここでは、J-CATの合計点を用い、迫田・石川・李（2020）に基づき、中級前半、中級、中級後半、上級前半、上級、母語話者相当に分ける。参考データとして母語話者のデータも加え、JFL学習者の習熟度別の「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向のグラフを図7に示す。

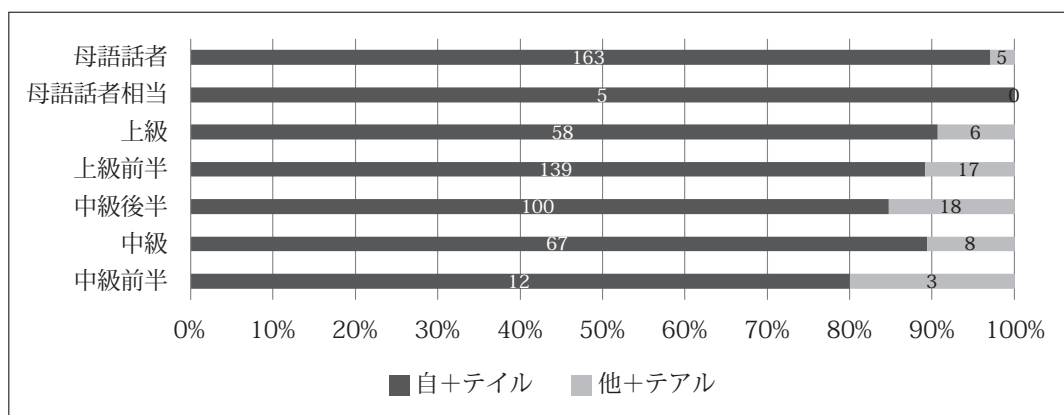


図7 JFL学習者の習熟度別の使用傾向

習熟度別に見てみると、用例数に差はあるものの、習熟度が上がるほど「他動詞+テアル」の使用比率が低くなる傾向にあり、母語話者の使用傾向に近づいていることがわかる。習熟度が上がるほど、理解可能な日本語のインプットが増え、その質も上がることが想定される。そのインプットの質の差が「他動詞+テアル」の使用傾向に現れたと考えられる。

以上より、教室外の日本語のインプット量が多いJSL学習者、質の高い日本語のインプットが増える上級レベルの学習者では「他動詞+テアル」の使用傾向が母語話者と類似していることがわかった。このことから、学習者特有の「他動詞+テアル」の使用傾向には、日本語教育のテキストの影響、とりわけ教室における日本語学習が影響していると考えられる。

7. おわりに

本稿では、I-JASにおける母語話者と学習者のデータをもとに、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の使用傾向の比較を行った。そして、学習者は「他動詞+テアル」を静的な絵

の描写によく用いる傾向があること、A2型の「他動詞+テアル」をよく用いる傾向があることの2点を、学習者に特有の「他動詞+テアル」の使用傾向として指摘した。また、この要因について、学習者のコロケーションの偏りを手がかりに、日本語教育での「他動詞+テアル」の取り扱い、学習環境による比較から見えるインプット量の差、習熟度による比較から見えるインプットの質の差という点から考察を行い、日本語教育の中でもとりわけ教室における日本語学習が影響していると結論づけた。

これらの考察結果から、学習者がA2型による表現を学習者が好んで選択したとは考えにくい。「開ける」「付ける」はいずれもA1型で用いるのが難しい動詞であることに加え、現状の日本語教育では「てある」の意味の違いに触れられていないからである。学習者が好んで選択しているというよりもむしろ、「開けてある」や「付けてある」を一種のかたまりで記憶しており、それをそのまま使用したと考える方が自然である。

以上を踏まえた改善案として、日本語教師に対する「他動詞+テアル」の意味の違いの説明や、授業内で行う練習の方法の再検討が挙げられる。

益岡（1987）において、A1型は、「置く」に代表される、「配置動詞」とでも呼ぶべき他動詞が中心となる」（益岡1987：222）との記述がある。対して、A2型に用いられる動詞は、「対象が何等かの状態変化を起こし、その結果が視覚可能な状態で存続することを表す、「状態変化動詞」とでも呼ぶべき他動詞である」（益岡1987：223）と述べられている。このことから、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」を比較して説明する際、つまり自他対応動詞を用いて、「自動詞+テイル」と「他動詞+テアル」の例を作る際には、A2型が多くなることは当然のことであると考えられる。

すなわち、A2型の例を多く提示している点が問題というわけではなく、A1型、B型との違いを説明していない点や、文作成練習に絵を用いている点を改善する必要がある。文型にも差が現れるA1型、A2型、B型の違いを日本語教師は理解した上で、「他動詞+テアル」を授業内で扱うべきである。そして、A1型には絵描写による文作成練習が適している一方で、A2型にはST1&SW1の「ピクニック」のようなストーリーを持たせた絵を用いたり、丁寧な場面設定を行ったりする必要がある。さらに、B型はこれらとは分けて扱うといった工夫が求められる。学習者が自然な日本語、つまり、より母語話者に近い使用傾向を習得するためには、文法的な正しさのみならず、母語話者がどのような状況において用いる表現であるかも踏まえて授業を設計していく必要がある。

また、本稿では扱わなかった「自動詞+テイル」「他動詞+テアル」の類義表現に「他動詞+ラレテイル」がある。(43)(44)に示すように、「他動詞+ラレテイル」は「他動詞+テアル」と異なり、動作主を明示することができるという特徴を持つ。

- (43) *太郎によってドアが開けてある。
 (44) 太郎によってドアが開けられている。

今回は、自他対応に着目し、「自動詞＋テイル」と「他動詞＋テアル」の比較に終始したが、「他動詞＋ラレテイル」についても検討の余地が残されている。「他動詞＋ラレテイル」は、日本語教育で文法項目として取り上げられることが少ない。しかし、その必要性に関する議論も含め、3つの表現の使用傾向の違いの分析を進めていく必要があると考えられる。今後の課題としたい。

付記

本稿は、日本語教育学会2025年度秋季大会において行った口頭発表に加筆・修正したものである。また、本稿はJSPS科研費25K16305の成果の一部である。

注

- 1) 学習者の用例にあった連体修飾や無助詞の用例計4例はここでは除外した。

【参考文献】

- 太田陽子 (2017) 「文脈化」という視点—「～てある」の練習の検討を例に— 江田すみれ・堀恵子 (編) 『習ったはずなのに使えない文法』 pp.25-44, くろしお出版.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」 『国語学』 70, pp.46-66, 国語学会.
- 迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」 『国語研プロジェクトレビュー』 Vol.6 No.3, pp.93-110, 国立国語研究所.
- 迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬 (編) (2020) 『日本語学習者コーパスI-JAS—入門 研究・教育にどう使うか—』 くろしお出版.
- 新谷知佳 (2022) 「自他対応をもつ動詞における自動詞と他動詞の使用比率に基づく分析—動詞対の形態的特徴に着目して—」 『KLS Selected Papers 4』 pp.73-88, 関西言語学会.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版.
- 中俣尚己 (2011) 「コーパス・ドライブン・アプローチによる日本語教育文法研究—「てある」と「ておく」を例として—」 森篤嗣・庵功雄編著 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』 pp.215-239, ひつじ書房.
- 早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」 『言語学研究』 6, pp.79-109, 京都大学言語学研究会.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』 くろしお出版.
- 三宅知宏 (2015) 「日本語の「補助動詞」と「文文化」・「構文」」 秋元実治・青木博史・前田満編 『ひつじ研究 叢書〈言語編〉第132巻日英語の文文化化と構文化』 pp.237-270, ひつじ書房.

【参考教科書・教師用指導書】

『初級日本語げんきⅡ 第3版』 ジャパンタイムズ出版.

『みんなの日本語初級Ⅱ 第2版 本冊』 スリーエーネットワーク.

市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク.

友松悦子・宮本淳・和栗雅子（2010）『新装版 どんなときどう使う日本語表現文型辞典』 アルク.

【用例出典】

コーパス検索アプリケーション『中納言』

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス：I-JAS』

（人文学研究科助教）